



Title	フッサー現象学は臨床のコミュニケーション研究とどう関わるのか：看護研究を中心に
Author(s)	小林, 道太郎
Citation	Communication-Design. 2013, 8, p. 35-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フッサール現象学は臨床のコミュニケーション研究とどう関わるのか—看護研究を中心に—

小林道太郎 (大阪医科大学)

How can we use Edmund Husserl's phenomenology to study clinical communication?

Michitaro Kobayashi (Osaka Medical College)

臨床コミュニケーションについて研究する手法は多様であるが、その中で「現象学的研究」と呼ばれるような種類の質的研究と、もとの現象学との関係はどのようなもののだろうか。特に現象学の創始者であるE. フッサールが行った哲学的分析の多くは、臨床コミュニケーションとの間に直接的な関連を見出すことが難しい。本論はまず、方法論の面からフッサール現象学と質的研究の間の差異と連続性を論じ、その上で、フッサールの諸分析の中から、質的研究に対しても示唆を与えうるようないくつかの概念を指摘する。フッサールの現象学に目を向けることは、臨床コミュニケーション研究の可能性をさらに広げることに役立つと筆者は考えている。

One of the methods for studying clinical communication is a qualitative approach named “phenomenological.” But the relationship between phenomenological qualitative researches and phenomenology as a philosophical discipline is not so clear. Especially, Edmund Husserl, the founder of phenomenology, scarcely wrote about concrete clinical communication. The aim of this paper is to show how Husserl's phenomenology can be used to study clinical communication. For that purpose, I examine differences and continuity of phenomenology and qualitative researches from a methodological point of view. And then, some of the concepts which can be helpful for qualitative researches are pointed out from Husserl's phenomenological analysis.

キーワード

現象学、質的研究、臨床コミュニケーション
phenomenology, qualitative research, clinical communication

1. はじめに

臨床コミュニケーションについて研究する場合、そのひとつのやり方は、臨床の実践家や、その対象者を含めた関係者等の経験や振舞いについて「質的に」分析する、というやり方であろう。たとえば医療、介護、教育などの現場でどのようなことが行われているかについて、多様な質的研究が行われている。そしてその一部は、現象学的研究、現象学的アプ

ローチ等と称されている。それらの方法や内容は必ずしもすべて同一ではないが、いずれにしてもそこでは、現象学の内に見出される方法や知見等が、臨床にかかわる質的研究に対して有益なもの、あるいはなんらかの示唆を与えるものとみなされている。

看護学やその関連領域においては、さまざまな形で現象学的研究が行われてきている。Benner & Wrubel [1989=1999] は現象学的アプローチを提唱し、ハイデガーやメルロー＝ポンティを参照しながら、心と身体を分離させずに人間を捉えることを主張した。関連する研究成果としてBenner [1994] 等がある。またToombs [1993=2001] は、フッサールらによる現象学の概要を述べた後、病気に対する医療者と患者本人の間の捉え方の違いを現象学的に論じている。Thomas & Pollio [2002] は長年にわたる研究実践に基づき、現象学的研究の方法と、それによるいくつかの研究成果を示している。Dahlberg et al. [2008] は、現象学と解釈学に基づくヘルスケア研究の質的方法を、研究上の留意点とともに詳しく述べている。現象学的研究は、看護学の研究法のテキストにも質的研究の一種として説明されている¹⁾。また現象学的方法を論じた心理学者ジオルジの方法²⁾ は日本の看護研究でもしばしば利用されている。西村ユミはメルロー＝ポンティの身体性の諸概念を手がかりに、看護の現場で起きていることを研究している³⁾。近年看護研究の雑誌で西村ユミの企画による現象学的研究の特集⁴⁾ が組まれている。

しかしこれらの諸研究において、現象学の創始者であるH. フッサールの思想は、ハイデガーやメルロー＝ポンティの思想と比べると参照されることが少ない。上の諸研究の中でも、ベナーや西村はフッサールにほとんど言及していない。またフッサールが参照される研究の場合でも、その思想を臨床と関連付けて論じる可能性について十分な議論がなされていないとは言えない。Paley [1997] は、看護領域においてフッサールの諸概念がしばしば間違っ理解されて使用されてきたと述べ、それらの概念が看護研究に利用できる可能性を疑問視している。Toombs [1993=2001] は分析の一部にフッサールの議論を用いているためこの点については後で触れる(4.1節)が、その後半で参照されるのは主にメルロー＝ポンティの議論である。ジオルジの方法はフッサールの方法に範を求めたものだが、これは心理学の研究のための方法であり、それを看護研究にそのまま用いることが有効かどうかは明らかではない⁵⁾。またそれが研究に利用される場合でも、現象学的ということの意味がフッサールにまでさかのぼって検討されることは少ない。

こうしてこれまでのところ、フッサールの思想が、「現象学的」とされる看護学等の諸研究(以下、哲学としての現象学と区別するため「質的研究」と呼ぶ)に対してどのような意味をもちうるのかは明らかではない。ひとつの考え方としては、フッサール現象学と質的研究とは互いにまったくの別物だ、と見ることも可能かもしれない。実際、フッサールの関心の方向は臨床の具体的な実践からはかなり隔たっており、その理論の多くは看護研究に直接役立つとは考えにくい。しかしフッサールの現象学⁶⁾ がその後の議論にも大きな影響を与え

ていることを思えば、その議論や考え方を踏まえて質的研究を見てみることもひとつのやり方として有意義であるだろう。私見では、フッサール現象学と看護研究との間には豊かな相互作用の可能性があるが、それはまだ十分に論じられてはいない。

本論ではフッサールの現象学のいくつかの要素を検討し、現象学と質的研究が相互に関連し合う可能性を示したい。そのためには、現象学と質的研究を安易に連結させるのではなく、まず現象学の方法論をあらためて確認し、原理的な面から質的研究との関連を捉えなくてはならない。その上でフッサールの現象学の分析内容のうち、質的研究に対して示唆的だと思われるものを確認する。個々の詳細についてはなお議論を深めることが可能であると思われるが、本論ではむしろ方法と概念にわたる全体像を示すことを目的とする。この検討により次のことが示されるだろう。すなわち、一方ではフッサールによる分析や諸概念が質的研究の手がかりとして利用可能であること、他方では、質的研究の成果が現象学の記述を補完・拡張する、あるいはその修正を要求することがありうるということ、である。

2. フッサール現象学の構想

まずフッサール現象学の基本的な性格をみるため、その形成過程を簡単に確認したい。現象学の突破口とされるのは、フッサールが1900年、1901年に発表した『論理学研究』（全2巻）⁷⁾である。同書は、論理学を心理学に解消しようとする考え方を批判して「純粹論理学」の理念を提示し（第1巻）、それがどのようにして可能であるかを論じるための諸研究を行う（第2巻）。特に現象学にとって重要な第2巻では、表現とその意味、その真偽、等、論理学にとって最も基本となる諸概念がそもそもどのようなものであるかを明らかにするため、それらを捉える意識の作用にさかのぼって分析を行っている。そこで現象学とは、表現や知覚などにおける意識の働き（「志向」(Intention)あるいは「志向作用」と呼ばれる）をその諸要素へと分析し、記述する研究であるとされる。

『論理学研究』で現象学の研究に必要なこととして強調されるのは、他の理論に依存しないという無前提性の原理である⁸⁾。現象学には、論理学であれ心理学であれ、何か他の理論を利用してそこから主張を導き出すというやり方は許されない。むしろ現象学の領域に固有の明証 (Evidenz) に基づいて記述が行われなくてはならない。

この無前提性の主張は、1913年の『イデーニI』⁹⁾ではより明確化され、「諸原理の原理」として次のことが述べられる。認識の正当性の根拠は、究極的には理論や言説ではなく、「原的に (originär) 与える直観」、すなわち実際にそのものを捉える直観である。そして直観の内に与えられるものはそのまま、かつその範囲に限って、受け取られなくてはならない¹⁰⁾。こうして現象学は理論構築の産物ではなく、実際に「見ること」に基づいた記述であ

る、ということが、フッサールによる現象学のもっとも基本的な規定である。

『イデー』では、フッサールの現象学は大きく拡張されている。意識の志向性 (Intentionalität)、すなわち「何かについての意識」である¹¹⁾ という性格は、具体的な体験としての作用一般の特性だとされ、意識の全体およびそのさまざまな働きに研究の目が向けられる。志向作用一般、およびさまざまな種類の志向作用の分析を通じて問われるのは、諸種の対象および世界が、どのようにして理性的なものとして構成されているか (そしてさらに、その構成論によって諸学問がどのように基礎づけられうるか)、ということだ。フッサールは物知覚のほか、想像や想起、時間意識、他者認識、等さまざまな意識の働きを詳細に分析してゆく。また意識だけでなく、その対象についても、意識されたもの、意識によって捉えられたものとしての観点から、独特の分析が与えられることになる。

このような研究を行うために、フッサールは、「現象学的還元」と名付けられたラディカルな態度変更が必要だと主張する。それは他の諸学から区別された、現象学の固有の領域を見出す手続きである。『イデー』によれば、それは次の2つの段階からなる。

- ・形相的還元—事実を問題とするのではなく、作用および対象の本質をみる
- ・超越論的還元—世界の存在を前提としない (対象は意識の対象として構成されたものである)

この現象学的還元については、その意味と必要性をめぐって、今に至るまで多くの議論がなされている。本論ではそれらに深入りすることはできないが、ここでまず確認しておきたいのは、これらの還元が、臨床コミュニケーションに関する質的研究と相容れないものだ、ということだ。なぜなら、(1) 質的研究は、インタビューや参与観察等のデータを基礎として行われるものである以上、経験的な学としての性格を持つ。すなわちそれは事実を問題にするのであり、「形相的還元」を行った後の本質だけを論じるわけではない。(2) 質的研究は、フッサールのいう自然的態度、すなわち世界の存在を当然の所与とする見方において行われる。つまりそこでは「超越論的還元」は行われていない。したがって2つの還元のいずれに関しても、フッサール現象学と質的研究とは、互いに問題領域を異にしているということになる。

しかしこのような差異は、より詳しく見てみるならば逆に、質的研究の学問的なあり方の問題を論じる手がかりともなるように思われる。次章でこのことについて考えたい。

3. 方法論の面からみた現象学と質的研究

3.1 本質学としての現象学

フッサールは、現象学は本質に関する学であるという。これについてまず確認しよう。

フッサールのいう「本質 (Wesen)」とは、時間空間内にある個々の対象ではなく、それらの対象やその諸属性等が「何であるか (was)」を示す類・種のような普遍者である¹²⁾。その意味で、それは私たちが言葉によってしばしば指し示しているものだ。

フッサールによれば本質は (語の拡張的な意味において) 「見る」ことができる。たとえば私たちは目の前の赤い紙片を見るとき、その紙片の表面色の赤を見ることもできるが、またそれとは違って、そこに限定されずいつでもどこでも現れることが可能なものとしての赤、つまり本質としての赤を見てとることもできる。この場合、この紙片の赤も、ポストの赤も (互いに空間的に隔てられた別々の個別者であるにもかかわらず) 本質として「同じ」赤であると言われる¹³⁾。ここには、日常語で「本質」というときに連想されるような、表面的なことがらに対する本来的・根本的「核心」という含みはない。本質を見ることをフッサールは本質直観と呼んだが、これは何ら神秘的なものではなく、むしろ日常的な、誰でも行い得ることだ。

ある程度抽象度の高い本質については、見ながら把握することで確実な認識を得ることができる、とフッサールはいう¹⁴⁾。本質の探究において用いられる方法は、「想像変更」「自由変更」等と呼ばれる。フッサールによれば、本質を見る場合、その事例である個別者を実際に知覚しているか、それとも単に想像しているだけかという違いは重要な違いではない。むしろ想像の場合には、対象をその想像の中で自由に変更することができるという利点がある。その本質にとって偶然的な諸要素は、想像の中で取り去ったり、別の要素に置き替えたりすることができる。しかし本質必然的なものは取り去ることができない。想像上の変更は本質の可能性の範囲内でのみ行いうるのものであって、本質上不可能なことは想像することもできない。そのため想像の自由な変更を通じて、私たちはその本質の必然的な特徴を知ることができる。現象学的記述とは、このような方法によって、意識のさまざまな働き (作用) の本質とその諸要素の関係や構造を描き出すことだといえる¹⁵⁾。

こうしたやり方は、自然科学のやり方とは大きく異なる。自然科学は、経験的方法によって因果関係や因果法則を発見し、それによって事象を説明することを目指す。そこで探求される因果関係は、事実を通じてのみ特定されうるという意味で事実関係 (matters of fact) であって本質関係ではない。これに対して、現象学が行うのは「見ること」によって事象を解明する本質記述だ。

3.2 非 - 本質学としての質的研究の可能性

この本質学との対比で、質的研究について考えたい。まず明らかなことは、質的研究は、現象学と同様、因果関係を特定しないということだ。質的研究の方法は、因果関係を主張するために必要な事実の収集・分析の方法を含んでいない。

質的研究の記述の一部には、本質関係の記述が含まれているかもしれない。一般に、個別の出来事や事態は、普遍的な本質関係が特殊化され個別化されたものとしても見ることができる。そこでは、他の人の経験や語りは、その本質関係の一事例として扱われることになる。記述された関係が普遍的なものであるならば、それは本質必然的な関係であるということができるだろう。

しかし普通は、質的研究でなされる記述のすべてが本質必然性に関わるわけではない。たとえば、「この」経験の特別さを捉えるためには、抽象度の高い普遍的本質関係について述べるだけでは十分でない、と感じられることは少なくないだろう。これを捉えるためには、(本質必然性ではないという意味で) 偶然的な諸事情や諸連関に注意を向け、それらを適切な記述にもたらしることが必要だ。こうして質的研究は、理念的には幅広い可能性がある中で、「実際には」このようなことが起きている・経験されている、等と主張するはずだ。

こうした記述は本質関係の記述ではなく、また統計的な相関関係等に基づいた記述でもない。ではこれが学問的記述だと言えるのはなぜだろうか。Thomas & Pollio [2002] は、分析の厳密さに関わる事項として、信頼性、妥当性、一般化可能性を挙げている。信頼性は研究結果の一貫性に関わるものであり、これについて同書は Werz [1983] および Giorgi [1975] を引用して、研究者の視点の理解、あるいは、研究者によって述べられた視点を採用すればその研究者が見たものを読者も見ることができること、としている¹⁶⁾。妥当性とは、その人が調査したいと思ったことが調査されているかどうか、ということだ。これには方法論的基準と経験的基準があり、「方法論的問題は、用いられた方法が研究主題にとって厳密かつ適切であるかどうかに関わる、経験的問題は、その結果がもっともらしくかつ解明的なもの (*plausible and illuminating*) であるかどうかに関わる」(Thomas & Pollio [2002: 41]) という。一般化可能性については、同書は量的研究との違いを強調し、現象学的研究では2、3例のインタビューでも分析に十分な場合があると主張する。その上で、「ここで「証明」は、もっぱら方法の純粋さに依存しているのではなく、研究報告の読者にも依存している」(Thomas & Pollio [2002: 42])、「質的研究の結果が適用可能であるかどうかの決定は、臨床判断にかかっている」(Thomas & Pollio [2002: 42]) としている。こうして、信頼性、経験的妥当性、一般化可能性を考える上で重要な役割を果たすのは、読者の理解であるということになる。そしてこの理解は、研究者の記述を通じて得られるものである以上、研究者が対象者の経験を理解したときの理解にかかっていると言うことができる。

理解については、しばしば解釈学の議論が参照される。Thomas & Pollio [2002] は H. G.

ガダマーの「地平融合」の概念を引いて、解釈においては個々の語を理解するにあたって文脈やその歴史的・個人的地平をも考慮しなくてはならないとしている。その際、理解とは解釈者の現在の状況からのみ可能なものとして、相手と自分との間を媒介することである(Thomas & Pollio [2002: 22-3])。またDahlberg et al. [2008]も解釈学を参照し、ガダマーの議論から、何か新しいものを見出すために自らの経験を問い直す私たちの「オープンさ」の重要性を強調している(Dahlberg et al. [2008: 75-6])。私たちのすべての理解は以前の経験から引き出されているのであり、予備的な解釈を再び問い直してそこに含まれる先入見を表面化させていかななくてはならない(Dahlberg et al. [2008: 286-8])。このことが解釈の客観性と妥当性を支えている(Dahlberg et al. [2008: 335-8])。家高[2011]は、看護学の質的研究の方法や評価基準の前提として、「理解とは何か」をガダマーに基づいて論じている。そのまとめによれば、「[理解]は単に個人的で主観的な体験ではなく、「問いと答えの論理」という本質的な構造をもっており、各人のさまざまな伝統の中で形成され、また伝統を形成する過程である」(家高[2011: 39])とされる。

さて解釈学はテキストや個人等の理解を広く論じるものだが、より特定して他者の経験を理解する可能性について考える場合はさらに、フッサールの『イデーニII』¹⁷⁾の議論が参考になると思われる。フッサールはそこで、他者の理解について次の2つの場合¹⁸⁾を区別している。

ひとつは、その種の関係や経過について、研究者や読者がすでに「類型的に」知っているという場合だ¹⁹⁾。これは研究者や読者が自分自身の経験を通じて知っているということもあるし、また自分の経験ではないさまざまな伝聞情報や知識によって知っているということもある。私たちは本質関係ではない傾向性や蓋然性についてもすでに多くの知識を共有しており、質的研究の記述内容がそうした知識に合致するということがありうる。

二つ目は、読者がその状況に想像的に身を置いてみることで、たしかにそのようなことがあると理解されるような場合だ。これは先の類型的な理解と同じことではない。なぜなら、今まで経験したことも想像したこともない、それゆえあらかじめ類型が形成されていないような状況であっても、私たちはそれを想像的に経験することができる場合があるからだ。フッサールはこれをその人の「動機付け (Motivation)」の理解として述べている。動機付けとは、何かあるものが別のものを動機づける、という形で理解されるような連鎖関係である。それは自然の因果関係とは異なる、「精神生活の法則性」²⁰⁾である。そこでは、ある具体的な条件のもとで、その人がどのように感じ・考えるか、どのように反応・応答し行為するかが問題となる。実際にそれを想定してみること、いわば疑似的に「自分でやってみる」ことではじめて、そのような反応がありうるということ、あるいはそうすることが自然であることが理解される²¹⁾。

このような理解に依存するということは、自然科学とも本質学とも異なった、質的研究の

独特な性格であると思われる。ただし、これらの理解は、あらゆる場面で可能なものというわけではない。たとえば研究の途中、インタビュー等で語られることのうちには、研究者がどんなに努力しても「理解できない」あるいは「うまく想像できない」と感じる部分が含まれているかもしれない。

3.3 超越論的還元と、質的研究における構成論的研究

次に、超越論的還元に関わる問題について見てみよう。

フッサールの超越論的還元を導く最初の動機は、認識論的なものだ。認識論的というのは、次のようなことだ。物であれ、普遍者であれ、あるものがそもそもどうして「ある」と言えるのか、と問うときには、その「ある」という主張の根拠が問われることになる。フッサールによればその根拠は、最終的には「見ること」としての明証にさかのぼる²²⁾。そして明証はすべて一様に同じものというわけではなく、対象の種類に応じて異なる。したがって対象の認識を問うためには、それぞれの明証のあり方を問わなくてはならない。このような認識論の問題設定においては、問題になっている当の対象の存在を前提にして、その存在者から因果的連鎖を通じて人間に情報（認識）が与えられる、等と論じることは逆転している。むしろ対象の存在を前提せず、それを「かっこに入れ」た上で、私たちに与えられる明証そのもののあり方を記述しなくてはならない。超越論的現象学においては、あれこれの対象だけでなく、すべてのものについて意識の明証にさかのぼって論じるため、世界全体に関するかっこ入れが求められる。超越論的還元とは、世界全体の存在をかっこに入れ、それを単に「意識されたもの」として捉える手続きである。

さて質的研究の場合、このような全面的なかっこ入れは不要である。質的研究は世界全体を問う必要がないからだ。世界全体を単に意識されたものとみなすことは、場合によってはむしろ、そこに含まれる多数の前提を利用できないものとすることによって、質的研究を不可能にしてしまうだろう。

しかし、超越論的還元を導く最初の動機が認識論的な関心であったことを思えば、この面から質的研究に関して、いわば「部分的な還元」といったものを考えることは可能だと思われる。すなわち、質的研究において、問題となる特定の対象やことごとについてのみ、その存在をかっこに入れ、それを意識によって構成されたものとして捉えるというやり方である。これによって、研究の関心は、その対象の捉えられ方、あるいはその当事者の認識あるいは経験に向かうことになるだろう。

たとえば個々人のその都度の病気や身体、あるいはそれらに関わるさまざまな出来事等は、人や立場によって異なった仕方では捉えられているだろう。このとき、客観的な疾病・疾患というものが先にあって、それがさまざまに捉えられているのだ、と言うことはもちろんできる。しかし客観的な疾病・疾患というものを前提せずに考えるならば、むしろ身体部

位の異変や苦痛、それに関わる社会的対人的交際等を含んだ当事者の多様な経験が先にあって、それがその病気の実質的なあり方を規定し、個別者としてのその病気というものを構成している、と捉えることも可能である。そして場合によってはそのような捉えの方が、私たちの経験に即した記述を行いやすくなるかもしれない。

そうだとすると、質的研究の少なくとも一部は、「当事者はそれをどのように経験しているか」という形で、あることながら、部分的な還元に基づいて認識論的（あるいは構成論的）な仕方であらうと理解することができる。このような記述の仕方が有効な対象や出来事は、病気の他にも多くあると思われる。

3.4 方法論的検討のまとめ

本章ではフッサールの現象学的還元論を参照項としながら、現象学との対比で質的研究の性格を見てきた。ここで示されたのは次のことだ。a. 質的研究は、現象学のような本質研究ではなく、また自然科学のような因果関係の研究でもない。それは事実に関する学として、研究者および読者の「理解」を要求する。b. 質的研究は、世界の存在を前提しているという点で、全面的な超越論的還元とは相容れない。しかし部分的には、対象を捉える意識の働きの側から対象の成り立ちを論じるというやり方も可能である。

ここからは、現象学と質的研究あるいは臨床コミュニケーション研究との関係について、次のことが言えるだろう。すなわち、ここで指摘された方法論の違いにもかかわらず、現象学の分析や知見を質的研究に利用することは可能である、少なくともそれが原理的に排除されているわけではない。なぜなら、上記aについて言えば、現象学の本質分析は、その下に包摂される諸事実に対しても当然当てはまることを主張するからであり、またbからすればその際、現象学的な見方を質的研究の中で部分的に利用することも可能であるはずだからだ。

このことをより具体的に確認するため、次章では、フッサールが行った諸分析のうち、質的研究にも関連付けることができるとされるものをいくつか取り上げてみる。

4. 現象学に含まれるいくつかの分析

ではフッサール現象学の中身を見てみよう。フッサールの現象学的諸研究は、ひとつあるいは少数の中心テーゼに集約されるような体系ではなく、むしろ現象学的還元によって現れた広大な研究領野の諸部分を、「見る」ことを通じて分析し記述してゆくものだ。ここではそのうち特に質的研究に関連すると思われる議論を、経験のどの部分に注目するかに応じて、「対象」(4.1)「諸作用」(4.2)「自我」(4.3)という3つのまとまりに分けて示す。ただ

しこれは、境界のはっきりした排他的な区分というわけでは決してなく、むしろ質的研究の関心の方向とフッサール現象学の諸分析とを関連付けやすくするための目安となることを意図した、ごく大まかなくくり方であるにすぎない。

4.1 意識と対象の相関

前章で述べた「部分的な還元」から示唆されるひとつの方向は、意識されたものとしての対象について、その構成を、経験のされ方から論じるというやり方である。この方向から見て重要なことは、志向的な意識の働きと、その対象との間に相関関係があるということだ。志向の対象は、志向に相関して異なったものとなる、あるいはその性格を変える。たとえば、「物」としては同一のものを見ている場合であっても、意識の仕方によって、対象の側に次のような違いがあり得る。

(i) 中心的なものとして注意を向けられて志向されうる対象は、個体だけではない。注意を向け変えることによって、たとえば複合体や集合全体、あるいは物の部分や性質、関係、あるいは類型や本質、事態や出来事等、多様なものが志向の対象となりうる。これらの違いは、世界の側の物理的な違いではなく、それらを把握する志向のあり方の違いに対応したものである。

(ii) 単純な対象だけでなく、より複雑な対象が構成され把握されうる。より複雑な対象とは、たとえば連言、選言、条件文や副文を含んだ文などで表現されるような複合的な事象である。これらは、端的な志向に基づけられて、より高次の志向が形づくられることによって、それに対応して構成される対象である。

(iii) 諸対象はそれぞれ、異なった様相において把握されうる。すなわちそれらは、「ある」「たしかにある」と信じられているものであることもあるが、逆に疑わしいものであったり、あるいは単に想定されたものだったりする。

(iv) 私たちは対象を単にその「客観的な」存在について問題にするだけでなく、それらを価値的なものとしても把握する。すなわちそれは、望ましいもの、よいものであり、あるいは価値のないもの、いやなもの等である。

(v) さらに私たちの実践的な関心に対して、それは目的であったり手段であったり有用なものであったり妨げになるものだったりする。

こうして、仮に物理的には同じ物が捉えられている場合であっても、そこには多様な捉え方が可能であり、それに応じて多様な志向対象が捉えられうる。したがって臨床の実践やコミュニケーションについて論じるためには、単に「客観的な」物世界のありようを言うだけでは不十分であり、むしろ当事者たちがその都度、上記のような多様な対象のうち「何を」意識している（いた）かを確認しなくてはならないだろう。それによってその当事者たちの言動や行為に対する理解が大きく変わってくるからだ。

関連する議論として、フッサールは、態度による世界の違いを述べている。そこでは人格的世界と、人格を含まない自然主義的世界とが区別される。私たちが通常生活しているのは、人格的世界である。そこには物だけでなく、人格的存在者としての人間や、道具や作品のような文化的対象が属している。フッサールの言い方では、たとえば私から見て他の人は身体の把握に基づけられて把握されるのであり、これは単なる物の把握とは異なる。しかしこれに対して異なる態度、すなわち自然科学者の態度をとることもできる。そこでは、人格や文化的価値などはすべて捨象され、人間を含めたあらゆるものは単なる物として捉えられる。この2つの世界の違いは、それを見る人の態度の違いに対応しているのもであって、どちらか一方だけが真であるというわけではない。

これらの概念を用いた研究として、先に触れたToombs [1993=2001] の分析がある。トゥームズによれば、患者にとっての病気の基本的意味は反省前の感覚的体験レベルで捉えられる。そこでは直接体験としての「異常な感覚的体験（痛み、衰弱、身体変調の視覚的把握）が、患者がそれまで世界の様々な計画に関わり続けた身体に何か変調をきたしたことに気づき、それに集中するようにしむける」（Toombs [1993=2001: 88]）。その変調は、反省レベルで主題化された場合、「病苦」という、より包括的な全体性として捉えられる。そして「さらなる解釈レベルで、患者は「病苦」を「疾患」として理解する。生の身体は、神経生理学的器官として客体化されることとなり、感覚の直接的混乱は特定の病気として理解される」（Toombs [1993=2001: 89]）。これに対して、医師にとって患者の病気は「病状」と捉えられる。「病状」は、自然主義的態度に基づけられた理論的、科学的構成概念によって主題化されている。そこでは病気は医学的なカテゴリーによって定義づけられた実体として構築される（Toombs [1993=2001: 89-93]）。患者と医師はしばしば同じ病気について語っていると思いこんでいるが、両者の間では捉え方に応じて理解されるものに系統的な違いが生じており、両者の間で共通の意味を確立することには困難が伴う。トゥームズはこのような志向の違いについて、さらに焦点化（次節で述べる注意の向き）や類型化（4.3節参照）といった、フッサールに由来する概念をも用いて説明し、その医療実践に対する含意を論じている。

4.2 作用の特性の区別と動機付け

次に、対象よりもむしろその都度の諸志向とその変化に注意を向けるという方向性がある。志向の差異はそのすべてが対象の違いに直接結びついているわけではなく、意識はより多様な仕方に変化し続けている。同じ対象を志向している場合でも、志向のあり方の違いを区別することができる。そのような差異として、次の2つを指摘することができる。

(ア) 空虚な (leer) 志向と充実された (erfüllt) 志向とが区別される。一般に、充実された志向はその主張に対して（程度に応じた）確証を与える。たとえばあるものについて単に

言葉だけで考えているとき、その志向は空虚な志向だと言われる。これに対して、そのあるものを実際に見ながらそれを言葉で表現しているとき、その志向は充実された志向である。また言葉だけでなく、知覚の中でも、充実と空虚の区別がある。見えている前面への志向は充実されているが、裏側や隠れた部分へ向かう部分志向は、実際にその裏側が見えていない以上、空虚な志向であり、充実されてはいない。連続的な知覚では通常、両者の関係は動的に変化する。たとえば物の側面に回り込みながらその物を見るとき、一方ではそれまで見えていなかった側面が見えてくることによって、空虚だった志向が連続的に充実され、他方では同時に、それまで充実されていた部分志向が空虚な志向へと転化してゆく。またその過程で、先の空虚な志向が実際の知覚によってより詳細化されたり、逆に間違いとして修正を受けたりする。

(イ) それとは別に、顕在的 (aktuell) な志向と、非顕在的 (inaktuell) な志向とが区別される。私たちは何かに対して中心的な注意を向けるという仕方でそれを志向しており、このような志向は顕在的な志向と呼ばれる²³⁾。しかしそれだけでなく同時に、その対象の周囲は、特に注意を向けられてはいないが周辺の仕方で、つまり非顕在的な仕方で志向されている²⁴⁾。私たちの意識は、顕在的な志向が非顕在的な志向に取り巻かれている、という地平構造をもつ。

こうした中、私たちの注意の方向は固定されたものではなく、次々と移り変わる。そこでは顕在的に志向されていた対象が背景に転じ、非顕在的に志向されていたものが注意の焦点となる。このような変化は、対象からの「刺激」によって動機づけられている、とフッサールは言う²⁵⁾。対象は自我を刺激し、その注意を引き寄せたり、欲望を引き起こしたりする。自我はその動機付けの力に従いつつそちらに向き直り、それをつかむ。物だけではなく、他の人格も自我に対して動機づける力をもつ²⁶⁾。他の人格に動機づけられる自我は、何らかの形でのコミュニケーションの可能性に対して開かれた自我だと言い換えることができるだろう。「〈他者を経験して、相互理解と合意によって構成される環境世界〉のことをわれわれは意思の通じあう (kommunikativ) 環境世界と呼ぶ」(Husserl [1952=2009: 25])。そしてフッサールによれば、人格的自我は、単に習慣的な仕方で動機づけられ、それに受動的に従うだけのものではない。それは習慣の中で、多様な動機付けの連関の中にありながら、そこで自由な自我として能動的に志向し行為する。このような動機付けは、因果関係とはまったく別のものとして、現象学的に記述されるべき関係であり、そこでは刺激という語も自然科学におけるそれとは異なる意味を持つ²⁷⁾。

これらの分析も、臨床コミュニケーション研究に関わりうる。たとえば言語における空虚な志向に関して、充実と確証あるいは修正の可能性は、その都度のコミュニケーションや実践に関して実質的な差異をもたらさう。また、コミュニケーションの中で非顕在的に志向されていたことがら、なんらかのきっかけでその人の注意を引くことによって次の言動や

行為につながってゆくということもある。臨床の場で起こる多様な出来事の分析に、これらの諸概念は有益であり得るだろう。

4.3 志向意識とその諸変化を可能にする構造としての自我

さて上に見たような諸志向やその変化は、何もない真空の中で起こるのではない。主体あるいは自我の側にも、あらかじめそれを可能にし条件づける諸構造が備わっている。それらがどのように働くのかが解明されなくてはならない。

フッサールは、統一としての自我は「私はできる (Ich kann)」のひとつのシステムだとしている²⁸⁾。そこには身体的な運動の可能性と、精神的な可能性とが含まれている。身体について言えば、それは自由に動かされるものとして、知覚の器官であり²⁹⁾、また意志の器官である³⁰⁾。この「私はできる」は、単に空虚な、「論理的な」可能性ではない。それはしばしば、具体的な動きの可能性として獲得されたものである。フッサールは次のような例を挙げている。「私はピアノを弾ける。しかしいつでも弾けるわけではない。練習しなかったので、習ったことをまた忘れてしまった。(中略)しかし長らく病床にあった場合には、改めて歩く練習をしなければならないが、じきにまた歩けるようになる」(Husserl [1952=2001: 96])。私の「できる」とは、つねに現実の行為に移すことができるものとして保持されている「積極的な潜在性」だ³¹⁾。

また自我は、経験によって類型的な知識を得ることができる。類型とは、似たもの同士が連合的に融合することで前言語的に形成される³²⁾「最低次の普遍性」であり、経験を通じて拡張されたり修正されたりしうるようなものだ³³⁾。これまでの経験によって私たちは、さまざまな知覚対象をあらかじめ類型的に知っている。たとえば私たちは、知覚的に出会われる個別者を、最初からスズメとして、あるいは犬として、知覚する。またそのとき私は、その犬がどのように吠えたり噛んだりするかを、類型的にはすでに知っている³⁴⁾。また他者について、人間一般に関する類型に従って理解したり、子ども、青年などの年代に応じた類型で見たりすることができる。さらにこの一人の人に特有のスタイルとしての個別の類型によって理解することもできる。

私たちはこのように獲得されたものに基づいて、あるものを把握したりさまざまなものに注意を向けたりしている。これらのことは、臨床場における理解や行為のさまざまな個人差や、経験による差異を論じる際の手がかりとなりうる。たとえばBenner [2001=2005] が記述しているような、看護師の技能習得の諸段階や、その最高段階の「達人看護師」の能力には、それぞれに複雑な多くの要素が含まれていると考えられるが、部分的には、上に述べた「私はできる」としての身体の獲得や、類型の形成のような概念を用いて分析することが可能だろう。その場合には、ここで概略的にしか述べていないことがらについてより詳細な過程や下位区分が識別されなくてはならず、またそれらが実際の行為の中で、どのような仕

方で注意や判断等を準備し条件づけているかが述べられなくてはならない。また逆に、これらの概念では適切に論じることができない能力や行為の要素が、分析を進める中で浮かび上がってくるかもしれない。それらを通じて、現象学の分析自体がさらに発展させられることも可能だろう。フッサールは、これらが実践・評価において、またさらに他者との多様な相互関係の中で、どのように働いているかといったことについては、相対的にわずかな分析しか残していない。

5. 現象学と質的研究

以上のようにフッサールは、対象、志向作用、自我に関して多様な一般的分析を与えている。先に簡単に触れたように(3.4)、いずれの領域においても、次のような関係が考えられる。すなわち、フッサールが記述を与えている一般的な本質可能性のうちで、質的研究はその下に属する特殊(類に対する種)の記述を与える、という関係である。たとえば、一般的な経験連関の可能性がある中で、特殊としての「この病気に関しては」かくかくのことが経験されている、等のことが述べられるだろう。このとき上に見たような現象学の諸概念や理論は、問題の視角や捉え方を整理する、あるいは問いをより精確な表現にもたらし、等のことに寄与しうるかもしれない。たとえば志向という概念をフッサールの意味で研究に用いるとするならば、それによって同時に、志向の普遍的な構造(空虚と充実、顕在性と非顕在性など)をも分析に利用できることになるだろう。

しかしさらに進んで、現象学的記述が質的研究に対して「答え」を与える、ということとはできない。なぜなら、質的研究が記述する特殊とは、一般と比べてより限定された領域に関わるものであり、それゆえ一般よりも多くの規定を含むものだからだ。質的研究が問題とする「ここ」に見られる特殊性がどのようなものであるかは、一般的な記述からは導き出すことはできない。それを与えることができるのは、より具体的なもの、すなわち質的研究の場合は基礎となるデータ、あるいはそれを通じて理解される個別具体的な経験、だけである。

質的研究の記述が、どこか別のところにある何らかの理論からではなく、データに基づいて、あるいはデータを通じてその人の経験を「見る」ことに基づいて得られなくてはならない、とするならば、これはフッサールが現象学に求めていることとまったく同じことだと言うことができる。現象学の記述は、最終的には、理論からではなく、「見ること」によって根拠づけられなくてはならない。この共通性、つまり自分の経験であれ他者の経験であれ、それを「見ながら」記述しなくてはならないということの共通性によって、質的研究の少なくとも一部は、本論3章で見た位置づけの違いにも関わらず、現象学である、あるいは現象学的である、と言うことができる。

質的研究の成果が、見ることによって得られた現象学的記述であるとするならば、そのことは、次のことを意味する。すなわち、質的研究の記述と現象学の記述とは同じ権利を持つものとして扱われなくてはならないということ、また質的研究は単に既知の現象学の枠内を動くだけのものであるとは限らないということである。質的研究において記述された関係や構造がある程度一般的なものである場合、それは現象学の理論や記述が欠けていたところに、具体的な経験記述に基づいた新たな理論がもたらされたということになるだろう。またさらには、そこで記述されたことがらがフッサールや他の研究者の現象学記述に反し、その修正を要求するということもありうる。

これまでの研究からいくつかの例を挙げる。Toombs [1993=2001] は先に (4.1節) みた分析の後、反省前のレベルにおける生の身体のありようを特徴づけ、さらに病気のときに生きられる身体の経験を記述してゆく。これらの論述においてしばしば参照されるのはフッサールではなくメルロー=ポンティであるが、榊原 [2011] はこの移行を「〈生きられている病いの体験〉という事象そのものから促され」(榊原 [2011: 10]) たことによるものと評している。フッサールの議論は、志向性の分析としてしばしば認識の場面を中心に論じられており、身体的行為に関する分析は比較的少ないが、看護やヘルスケアの領域では身体があらためて大きな問題となりうる。

西村 [2007] は、臨床のさまざまな局面における看護師および実習生の身体の感覚的経験を、その語りに従って具体的に論じている。そこではある患者の身体の状態や振る舞いが、「Aさん〔看護実習生〕の身体に直接働きかけて、「恐る恐る」という感覚を伴う行為をとらせたり、「苦しい」「辛い」という感覚をともなってAさんに語りかけてくる」(西村 [2007: 47])。また一部の看護師の協働の中では、「ともに考えたり動いたりするだけではなくて、ときに、他の看護師の振る舞いに触れるなかで、〈病い〉の経験が編み直される」(西村 [2007: 183])。フッサールの論じる身体が主として自我の一部としての「私ができる」であったのに対して、ここで身体およびその感覚は、自我のコントロールとは異なる回路で(も)作動しコミュニケーションしている。西村はメルロー=ポンティを何度か参照しているが、ここで述べられた経験がすべてメルロー=ポンティの論じていることに回収されるわけではないだろう。

看護師のインタビューに基づいて現象学の理論に関する記述を行う試みとして、村上 [2011a]、村上 [2011b] がある。村上 [2011a] は、植物状態の患者との交流に関する看護師の語りを分析した西村 [2001] の内に、これまでの現象学が記述できなかった新たな現象の発見を認める。村上は、看護師からみた植物状態の患者とのコミュニケーションを、通常の意味内容を介したコミュニケーションと区別し、独自概念を用いて「純粹な超越論的テレパシー」と呼ぶ。さらにその背景にある現象として、患者の「目の光」として経験される視線

の受容の可能性である「潜在的な視線触発」を見ている。また村上 [2011b] は、ケアと精神医学における他のさまざまな著作の経験的記述を用いて分析を行っているが、そのうち特に第1章および第5章は、村上が行った看護師へのインタビューに基づいた議論である。第1章では、ハイデガーの道具論・行為論が具体化され拡張される。第5章では、「予後の告知をしないことをめぐる看護師の語りを題材と」(村上 [2011b: 118]) して、うそや秘密が状況を共有できなくさせ、行為を不可能にさせることを論じている。

これらのことはいずれも、現象学の理論の拡張およびさらなる具体化の可能性と必要性を指し示しているように思われる。その可能性は特にフッサールに限定されるわけではないが、しかし中には、前章に見たようなフッサールの議論を拡張したり修正したりすることで、よりよい見通しを与えられる部分もあるだろう。このようなことが現象学として正当であると言えるのは、次の事情があるからだ。すなわち、フッサール自身が、自らの考えを繰り返し疑問に付し、新たに見えてきた事象に照らしてそれを書き換え、修正し展開するということを生涯にわたって続けていたからだ。臨床場における具体的な経験に照らして理論を拡張し修正するということは、現象学に元から求められていることだと言することができるだろう。

注

- 1) Holloway & Wheeler [2002=2006: 167-184]。また解釈学的現象学的研究の実践的なガイドとして Cohen et al. [2000=2005]。
- 2) Giorgi [1985] , Giorgi [2009]。
- 3) 西村 [2001] , 西村 [2007]。
- 4) 特集「現象学的研究における『方法』を問う」(2011)『看護研究』44 (1)、特集「経験を記述する：現象学と質的研究」(2012)『看護研究』45 (4)。
- 5) 榊原 [2011: 8-9] はジオルジの方法に対する疑問として次の2点を指摘している。意味の単位に分解する手続きによって、全体の脈絡が見失われ、個別の体験が持つ意味を汲み取れなくなる恐れがある。病んだ身体によって意味変容した世界体験を認識するために必要な身体性への関心が希薄である。
- 6) 以下、単に「現象学」と言うときでも、フッサールの現象学を指す。
- 7) Husserl [1984a=1968] , Husserl [1984b=1970, 1974, 1976]。
- 8) Husserl [1984b=1970: 26-9]。
- 9) Husserl [1976=1979, 1984]。
- 10) Husserl [1976=1979: 117]。
- 11) 「こうした本質性質を共通して持つすべての体験は、また「志向的体験」と呼ばれる(これはすなわち、『論理学研究』で謂われた最広義の作用のことにほかならない)。これ

- ら諸体験は或るものについての意識である限り、その諸体験は、この或るものに「志向的に関係づけられている」と言われるのである」(Husserl [1976=1979: 159])。「われわれはかつて、志向性というものを、体験の持っている固有性、すなわち「或るものについての意識である」という固有性と理解した」(Husserl [1976=1984: 86])。
- 12) 「さしあたりまず「本質」ということによって表示されていたものは、或る個物の自己固有の存在のうちその個物の何であるかとして見出されるものであった」(Husserl [1976=1979: 64])。
- 13) このようなものとして本質は、時間空間内にある「実在」ではない。実在としての事実や個別者が時間空間内にあるのとは異なり、本質は事実から独立した非時間空間的対象である。
- 14) 「最下位の色の差異、最小のニュアンスは特定しようとしても逃れ去ってしまうかもしれないが、しかし「色」と「音」との区別は、世界中にこれ以上確実なものはないほど確実な区別である」(Husserl [1987: 33] ; cf. Husserl [1976=1984: 22])。また「 $a + 1 = 1 + a$ である」「判断は有色ではあり得ない」「質的に異なる2つの音のうち、一方はより低く、もう一方はより高い」「知覚はそれ自体として何かの知覚である」等の命題 (Husserl [1976=1979: 109]) も同様だろう。
- 15) フッサールの分析・記述に用いられる基本的な関係は、全体部分関係（基づけを含む）（『論理学研究』第2巻第3研究）、動機付け（『イデーニII』）、連合（『受動的総合の研究』）などである。
- 16) Thomas & Pollio [2002: 40]。
- 17) Husserl [1952=2001, 2009]。
- 18) 「しかし、経験と一般的な類型とが本質的な役割を果たしているとはいえ、主体は単なる経験の統一体ではないのであるから、このことを強調し明確にすることが重要である。私は他の主体の立場になり、そして感情移入によって〈何がどのような力で彼を強力に動機づけているのか〉を把握する。そうすることによって私は、〈これこれの動機が彼を強力に動かしているために、彼がどのように行動しているのか、かつまた行動するであろうか、彼に何ができ、何ができないか〉を、内面的に理解しうる」(Husserl [1952=2009: 120])。
- 19) 類型については後の4.3を参照。
- 20) Husserl [1952=2009: 56]。動機づけについて後の4.2も参照。
- 21) 他者について経験的に知るやり方と、感情移入によって知るやり方との区別は、自分自身を理解する場合の2つのやり方の区別と平行しており、これを前提にしていると見ることができ。すなわちフッサールは、自分自身について経験的に知ることと、動機づけの面から理解することとを区別している。Husserl [1952=2009: 110-3] 参照。またそれとは

- 別に、フッサールは、人を理解する際、周囲世界や自然因果等も手がかりとなることを指摘している (Husserl [1952=2009: 120-2])。
- 22) 「直接的に「見る」ということ (…)、つまり、ただ単に、感性的に、経験しつつ、見るということだけではなくて、どんな種類のものであれ原的に与える働きをする意識である限りの見るということ一般こそが、あらゆる理性的主張の究極の正当性の源泉である」 (Husserl [1976=1979: 105])。
- 23) 「何らの付加語をも添えずに端的に作用とだけ言われた場合には、もっぱら、本来の作用、すなわち言ってみれば顕在的な、遂行された作用のことだけが、意味されていることにしておく」 (Husserl [1976=1984: 89])。
- 24) 「このような非顕在性といえども、しかしながらやはり、それ固有の本質の面では、すでに「或るものについての意識」ではあるのである。それゆえに、かつてわれわれは、志向性の本質の中に、コギトに特有なもの、つまり「何かに対する目差し」、もしくは自我の配意 (…) を、含めなかったのであった」 (Husserl [1976=1984: 88])。
- 25) 「客観が《主観に迫って》主観を刺激し (理論的、審美的、実践的な刺激)、いわば配意される客観であろうとして、ある特殊な意味で (すなわち配意されたいという意味で) 意識の門をたたいて、主観を引きつけ、主観がそれに引き寄せられて、結局その客観が注目の対象になるのである。あるいは客観が実用的な面で〔主観を〕引きつけ、いわば主観がそれを手にとって享受するように誘ったりするのである」 (Husserl [1952=2009: 55])。
- 26) Husserl [1952=2009: 24]。
- 27) 「しかしわれわれが志向的な主観-客観-関係という基盤に、すなわち人格と環境世界の間関係という基盤に立てば、刺激という概念は根本的に新しい意味を獲得する。自然の諸実在としての諸事物と人々との間の因果関係に代わって、諸人格と諸事物の間の動機付けの関係が登場し、そしてそれらの事物は、自然界にそれ自体に存在する事物—精密自然科学が唯一客観的に真と認める諸規程を具えた精密自然科学の事物—ではなく、〈経験され、思惟その他の仕方で措定され思念されている諸事物そのもの〉すなわち〈人格的な意識の志向的な対象〉である」 (Husserl [1952=2009: 20])。
- 28) 「統一体としての自我は《私はできる》の一つの体系である。ただし物理的な《私はできる》すなわち身体的および身体を介してのそれと、精神的なそれとは区別すべきである」 (Husserl [1952=2009: 96])。
- 29) 「まず第一に身体はあらゆる知覚の手段であり、知覚器官であるから、あらゆる知覚に必然的に関与している」 (Husserl [1952=2001: 66])。いわゆる五感だけでなく、身体の運動感覚であるキネステーゼが知覚の条件となっていることについて、フッサールは『物と空間』 (Husserl [1973]) で詳しい分析を行っている。
- 30) 「とりわけ、すでに身体 (すなわち局在化された諸感覚の層を持つ事物) と見なされて

いる身体は意志の器官であり、私の純粹自我の意志にとっては直接自発的に動かすことのできる唯一の客体であり、そしてまた〈例えば直接自由に動かせる私の手が押ししたり、つかんだり、持ち上げたりする他の諸事物を間接的に思いどおりに動かすための手段〉でもある」(Husserl [1952=2001: 180])。

31) 「このように精神的な自我は、一個の有機体として、しかも少年、青年、老年の諸段階につれて正常かつ類型的な様式で発達する諸能力を具えた有機体として統握されうる。(中略) 能力は空虚な力量ではなく、積極的な潜在性であり、…」(Husserl [1952=2009: 97])。

32) Husserl [1999: 385-6]。

33) Husserl [1999: 400-1]。

34) Husserl [1999: 398-9]。

文献

Benner, Patricia (2001) *From Novice to Expert: Excellence and Power in Clinical Nursing Practice, Commemorative edition*, Upper Saddle River: Prentice Hall. = (2005) 井部俊子 (監訳) 『ベナー 看護論 新訳版』医学書院。

Benner, Patricia (ed.) (1994) *Interpretive Phenomenology: Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness*, Thousand Oaks: Sage Publications.

Benner, Patricia and Judith Wrubel (1989) *The Primacy of Caring: Stress and Coping in Health and Illness*, Menlo Park: Addison-Wesley. = (1999) 難波卓志 (訳) 『現象学的人間論と看護』医学書院。

Cohen, Marlene Z., David L. Kahn and Richard H. Steeves (2000) *Hermeneutic Phenomenological Research*, Thousand Oaks: Sage Publications. = (2005) 大久保功子 (訳) 『解釈学的現象学による看護研究：インタビューを用いた実践ガイド』日本看護協会出版会。

Dahlberg, Karin, Helena Dahlberg and Maria Nyström (2008) *Reflective Lifeworld Research, 2nd edition*, Lund: Studentlitteratur.

Giorgi, Amadeo (1975) “An application of phenomenological method in psychology,” in Amadeo Giorgi et al. (eds) *Duquesne Studies in Phenomenological Psychology, vol. 2*, Pittsburgh: Duquesne University Press: 82-103.

Giorgi, Amadeo (ed.) (1985) *Phenomenology and Psychological Research*, Pittsburgh: Duquesne University Press.

Giorgi, Amadeo (2009) *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology: A Modified Husserlian Approach*, Pittsburgh: Duquesne University Press.

Holloway, Immy and Stephanie Wheeler (2002) *Qualitative Research in Nursing, 2nd*

- edition, Hoboken: Wiley-Blackwell. = (2006) 野口美和子 (監訳) 『ナースのための質的研究入門：研究方法から論文作成まで 第2版』医学書院。
- Husserl, Edmund (1952) *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, zweites Buch: phänomenologischen Untersuchungen zur Konstitution. Husserliana IV*, hrsg. von Marly Biemel. Den Haag: Martinus Nijhoff. = (2001, 2009) 立松弘孝他 (訳) 『イデーニII』みすず書房。
- Husserl, Edmund (1973) *Ding und Raum. Vorlesungen 1907. Husserliana XVI*, herausgegeben von Ulrich Claesges, Den Haag: Martinus Nijhoff.
- Husserl, Edmund (1976) *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie. Husserliana III/1*, neu hrsg. von Karl Schuhmann, Den Haag: Martinus Nijhoff. = (1979, 1984) 渡辺一郎 (訳) 『イデーニI』みすず書房。
- Husserl, Edmund (1984a) *Logische Untersuchungen; Bd. 1 Prolegomena zur reinen Logik. Husserliana XVIII*, hrsg. von Elmer Holenstein. Den Haag: Martinus Nijhoff. = (1968) 立松弘孝 (訳) 『論理学研究1』みすず書房。
- Husserl, Edmund (1984b) *Logische Untersuchungen; Bd. 2 Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Husserliana XIX*, hrsg. von Ursula Panzer. Den Haag: Martinus Nijhoff. = (1970, 1974, 1976) 立松弘孝他 (訳) 『論理学研究2-4』みすず書房。
- Husserl, Edmund (1987) *Aufsätze und Vorträge 1911-1921, mit ergänzenden Texten. Husserliana XXV*, herausgegeben von Thomas Nenon und Hans Rainer Sepp. Dordrecht: Martinus Nijhoff.
- Husserl, Edmund (1999) *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*. Red. und hrsg. von Ludwig Landgrebe. 7. Auflage. Hamburg: Meiner. = (1999) 長谷川宏 (訳) 『経験と判断』河出書房新社。
- Paley, John (1997) "Husserl, phenomenology and nursing," *Journal of Advanced Nursing*, 26: 187-193.
- Thomas, Sandra P. and Howard R. Pollio (2002) *Listening to Patients: A Phenomenological Approach to Nursing Research and Practice*, New York: Springer.
- Toombs, S. Kay (1993) *The Meaning of Illness: A Phenomenological Account of the Different Perspectives of Physician and Patient*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers. = (2001) 永見勇 (訳) 『病いの意味：看護と患者理解のための現象学』日本看護協会出版部。
- Werz, Fred J. (1983) "From everyday to psychological description: Analyzing the moments of a qualitative data analysis," *Journal of Phenomenological Psychology*, 14: 197-

242.

家高洋 (2011) 「理解について：質的研究の前提として」『看護研究』44 (1): 27-40。

榊原哲也 (2011) 「現象学的看護研究とその方法」『看護研究』44 (1): 5-16。

西村ユミ (2001) 『語りかける身体：看護ケアの現象学』ゆみる出版。

西村ユミ (2007) 『交流する身体：〈ケア〉を捉えなおす』日本放送出版協会。

村上靖彦 (2011a) 「潜在的な視線触発と純粋な超越論的テレパシー」『看護研究』44 (1): 76-84。

村上靖彦 (2011b) 『傷と再生の現象学：ケアと精神医学の現場へ』青土社。